

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：34316

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652088

研究課題名(和文)日本における職場談話研究の体系的発展に向けて：社会言語学的談話研究とコーパス構築

研究課題名(英文) Toward the Systematic Development of Research on Japanese Workplace Discourse: Sociolinguistic Discourse Research and the Construction of a Corpus

研究代表者

村田 和代 (Murata, Kazuyo)

龍谷大学・その他部局等・教授

研究者番号：50340500

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、萌芽期にある国内の職場談話研究の発展のために、職場談話の先進事例調査(ニュージーランド国立ビクトリア大学職場談話研究プロジェクト)、国内の職場で実際に行われている談話の収録、収録談話のコーパス化(整理、文字転記)、収録談話の分析を行った。さらに、国内職場談話研究者の情報交換やネットワーク構築のためのラウンド・テーブルを開催した。12の職場から約120時間の談話の収録を行い、呼称、コードスイッチ(方言、日英語)、行為指示表現、談話ストラテジー(ユーモア、笑い、雑談)等の多様な言語ストラテジーについて分析を行い、研究成果については、国内外の学会や学術ジャーナルで報告を行った。

研究成果の概要(英文)：In order to advance research in the field of Japanese workplace discourse, this research has drawn on previous workplace-related studies, recorded naturally occurring discourse in Japanese workplaces, created (through arranging and transcribing) a corpus of recorded discourses, and carried out analyses of the recorded data. Furthermore, a roundtable event was held at which researchers of discourse in Japanese workplaces were able to get together to network and share information. Approximately 120 hours of recorded discourse was gathered from 12 workplaces. Analyses of the data were then carried out in relation to various linguistic strategies such as person reference, code-switching, directive expressions, and discourse strategies (humour, laughter, small-talk). The results of this research have been presented at domestic and international academic conferences and published in academic journals.

研究分野：社会言語学

キーワード：社会言語学 職場談話 ビジネスコミュニケーション インタラクション 言語使用 談話分析 研究者交流

1. 研究開始当初の背景

ビジネスコミュニケーションを含む職場のコミュニケーションの研究は、主としてアンケートによる内省的意識調査か、個々人の経験に基づくものが主流であったが、1990年台以降、自然談話の分析に基づく職場談話の研究は急速に発展してきた(Bargiela-Chiappini & Harris 1997)。しかし、欧米を中心とした英語圏社会での研究が中心で、アジア、特に日本における研究は非常に少ない。日本の職場談話の研究としては、たとえば Murata (2011), Saito (2011)があげられるが、何れも単独の職場の談話データに基づいた研究である。研究代表者は、分担者及び研究協力者2名と共に、2011年7月国際語用論学会において、“Linguistic Identity Construction in the Japanese Workplace”というパネルで発表し大きな反響を得た。その際、日本における職場談話研究を体系的に発展させる必要性を痛感し本共同研究を企画した。

Bargiela-Chiappini, F. & Harris, F. 1997. *The Language of Business: An International Perspective*. Edinburgh U. P.
 Murata, K. 2011. Relational practice in meeting discourse in New Zealand and Japan: a cross-cultural study, Unpublished PhD Thesis, Victoria University of Wellington, New Zealand.
 Saito, J. 2011. Managing confrontational situations: Japanese male superiors' interactional styles in directive discourse in the workplace. *Journal of Pragmatics*, 43-6, 1689-1708.

2. 研究の目的

本研究の研究目的は次の3点である。

- (1) 実際の職場談話の収録を行い、先進事例を参考にしながらデータ構築の基盤を整え、日本の職場談話コーパスの構築に着手する。
- (2) 相互行為的社会言語学 (international sociolinguistic) の手法や実践コミュニティ (communities of practice) といった概念をベースとして、様々な言語ストラテジーについて収録した談話を分析し、日本の職場談話に見られる言語的特徴を可視化する。
- (3) 国内の職場談話研究のさらなる発展のために、職場談話研究者のネットワーク作りができるようなラウンド・テーブルを開催し、それぞれの研究についての情報交換を行うと共に、日本における職場談話研究の可能性についても議論する。

3. 研究の方法

(1) 研究目的(1)について

先進事例調査として、職場研究の中で国際的に最も代表的な研究プロジェクトであるニュージーランド国立ビクトリア大学の Language in the Workplace Project (以下 LWP) の研究代表者であるホームズ教授(研究協力者)を訪問し、収録データのコーパス化の手順や方法について学んだ。

職場談話の収録協力先を開拓するために、共同研究者4名の人的ネットワークを用いるのと並行して、100社に手紙、メールで依頼文を送付した。

	関東	関西	計
大企業(資本金5億円以上)	20	10	30
中小企業(資本金1億円未満)	10	30	40
外資系	25	5	30
	55	45	100

結果、12の職場から約120時間(録画 and/or 録音)の職場談話の収録を実施することができた。

(2) 研究目的(2)について

多様な言語ストラテジーについて収録談話の分析を行った。分析は、相互行為的社会言語学 (interactional sociolinguistics) からのアプローチで行い、共通の概念(実践共同体: communities of practice) を用いた。

(3) 研究目的(3)について

2014年12月13日に龍谷大学でラウンド・テーブル『職場談話研究』を開催した。本研究プロジェクトメンバーの4人に加えて国内の職場談話研究者3名をお招きし、公開ラウンド・テーブルとして開催した。事前に関連学会や言語学関連のメーリングリストでも案内をし、オーディエンスとして20名の参加があった。当日のプログラムは以下の通りである。

村田和代 龍谷大学	「イントロダクション：国内職場談話研究の現状・課題・目的」
村田和代 龍谷大学	「職場談話のユーモアと笑い：3企業の会議を比較して」
齋藤純子 テンブル大学	「英語交じりの日本語：外資系企業における会議についての一考察」
平本 毅 京都大学	「日常と仕事を架橋するトーク：サービスエンカウンター会話分析」
藤尾美佐 東洋大学	“ ‘ Harmonious Disagreement ’ in Japanese Business Meetings ”
田中宏昌 明星大学	“ Talk in multicultural meetings: PowerPoint presentation ”
バーク・ア ンドリュー 関西大学	“ ‘ Ore no fuchui chau yan ’ : Dialect in the Japanese Workplace Discourse ”
クック治子 ハワイ大学	“ Construction of shakaijin in a Japanese company ”
全体ディスカッション	

4. 研究成果

(1) 複数の職場から職場談話（会議、新人研修、朝礼等）の収録を行った。先進的事例であるLWPのデータ管理・保存方法を参考に、収録したデータの整理、文字化を行った。談話の収録の承諾が取れるようにさまざまな方法で協力先を探したが、とりわけ大企業からは守秘義務を理由に、承諾をとることができなかった。

(2) 文字化した言語データにおける言語使用の有様をみるために、複数の言語ストラテジーから談話分析（文字転記、音声、ビデオデータを使用）を行った。分析結果は以下のようにならる。

会議にみられるユーモアや笑いについて

ユーモアの発言者はそれぞれの実践コミュニティによって異なっていたものの、発言者には共通した特徴（その職場、あるいはその会議の場で権力を有すること）がみられた。そして、ユーモアは長いスパンで双方向に構築されるというよりも、発言者以外のメンバーがユーモアに応える（笑う）という一方向で行われていた。また、笑いはユーモアに答えるといった、おもしろさを表現するだけでなく、収録した複数の会社の会議に共通してみられたのが、「緊張緩和の笑い」であった。目上のメンバーに依頼するとき、依頼を断るとき、相手の意見に不同意を表明するとき、といった個人のフェイスに関わる場合のみならず、その会社の業績がよくないということや報告するといったその実践共同体全体に関わる場合も緊張緩和の笑いが多くみられた。

外資系企業の会議における日本人従業員の英語と日本語の言語変換について

参加者が日本人のみである会議においても、日本語と英語の併用が見られた。その併用はいずれも英語要素が日本語の体系に埋め込まれる形で起こっている。非一般的な英語が使用されているにもかかわらず、会議が円滑に進行していることから、日本語と英語の言語混用は会議での「相互行為の言語」となっていることが伺える。また、言語変換が特別な働きをしている場合もあり、英語から日本語への変換（コードスイッチング）は、話者の主張などを強調する働きを担い、日本語から英語へのコードスイッチングは他の参加者に自分の意図を明確に伝える役割を果たしていることも分かった。更に、日本人従業員は、職場関連の話をするときに言語変換を頻繁に行っていることも明らかになった。つまり、日本人従業員は、話題に応じて言語変換を巧みに操り、会議を進行していると言える。

指示表現(directive)について

収録した談話データにおける会社上司の発話を分析した結果、directiveの種類によりストラテジー型になったり、わかまえ型になったりすることがわかった。今までの研究ではdirectiveの種類を区別していないので、今回の分析はdirectiveとポライトネス研究に新しい方向を示唆するものと言える。また、西洋はストラテジー型社会、東洋はわかまえ型社会という区分よりも、どのような場面、発話でどちらの型のポライトネスが出てくるかを検証する必要がある点が明らかになった。

新入社員研修にみられる言語社会化のストラテジーについて

収録した新入社員教育の談話を社会言語化理論により分析した結果、社会人になるための過程を細かく観察することができた。社会人という概念を新入社員は必ずしもみづから受け入れるわけではなく、社会人としての意識を相互行為のなかで高める過程が見られた。社会言語化理論を使い、日本の幼児と母親の相互行為を分析した論文(Clancy 1986; Burdelski 2010, 2013)によると、日本の母親は幼児に思いやり、間接的表現を相互行為を通して教える。今回の研究では、新入社員教育でも思いやりなどがビジネスのフレームのなかで取り上げられていることが分かった。

Burdelski, M. 2010. Socializing politeness routines: Action, other-orientation, and embodiment in a Japanese preschool. *Journal of Pragmatics*, 42, 1606-1621.

Burdelski, M. 2013. "I'm sorry, flower": Socializing apology, relationships, and empathy in Japan. *Pragmatics and Society*, 4-1, 54-81.

Clancy, P. 1986. The acquisition of communicative style in Japanese. In Schieffelin & Ochs (eds.) *Language Socialization Across Cultures*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 213-250.

呼称について

一人称や相手の呼び名（例：役職名、苗字+さん）を分析したところ、一般的にデフォルトと考えられている呼称を用いる場合が多くみられたが、異なる場合もあった。デフォルトでない呼称を用いる場合は、話者のなんらかの意図があることが明らかになった。話者の意図については、談話分析だけでは明らかにならない場合もあり、フォローアップインタビューも並行して取り入れると、よりダイナミックな分析が行えることも明らかとなった。

方言の使用について

関西にある一企業の会議における方言の

使用について調査したところ、業務に関することを話す場合には敬体が用いられていたが、個人的な話題や情報伝達というよりも感情に関わるようなことを話すときには方言が用いられていた。

(3) 談話分析の結果は、国内外の学会や 2014 年 12 月に開催したラウンド・テーブル(下記)で報告した。本研究については海外の出版社から出版の依頼を受け、出版に向けて準備を行っている。

(4) ラウンド・テーブル『職場談話研究』開催を通して、研究者間での情報交換を行うことができた。さらに、研究を進めていくうえでの課題も共有した。実際の職場で仕事をされている現場での談話を収録させていただくため、収録協力現場との信頼関係構築や現場へのフィードバックは欠かせない。今後、職場談話を発展させるためには、現場との連携が鍵となることが明らかになった。

(5) 3 年間の研究で達成できなかったこともあり、(例：収録したデータの文字化の未完成等) 本研究は、2015~2017 年度 基盤研究(C)「国内職場談話の社会言語学的研究：グローバル化に向けての新たなステップ」(研究課題番号：15K02538)として継続して研究を進める。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

本研究は、研究協力者 2 名も含む 4 名での共同研究のため、共同研究者の業績も含める(下線は付していない)。

〔雑誌論文〕(計 2 件)

齋藤純子. 2014. 外資系企業における日本人従業員のコードスイッチング: モノレクタルな視点から. 『社会言語科学会第 34 回大会発表論文集』 pp.22-25. 【論文・査読なし/但し本学会発表に関しては審査あり】

村田和代. 2013. NZ および日本のビジネス・ミーティングにみられるスモールトークについて. 『社会言語科学会第 32 回大会発表論文集』 pp.187-188. 【論文・査読なし/但し本学会発表に関しては審査あり】

〔学会発表〕(計 11 件)

Cook, Haruko. Socialization of new employees in a Japanese company: Promoting and negotiating politeness. American Association for Applied Linguistics and Association Canadienne de Linguistique Appliquee 2015 Conference. 2015/3/24. Toronto, Canada.

村田和代. 日本企業の会議にみられるコ

ーモアについて: 3つの企業を比較して. 第 74 回国際ビジネスコミュニケーション学会全国大会. 2014 年 10 月 5 日. 神戸市外国語大学.

齋藤純子. 外資系企業における日本人従業員のコードスイッチング-モノレクタルな視点から-. 第 34 回社会言語科学会研究大会. 2014 年 9 月 13 日. 立命館アジア太平洋大学.

Saito, Junko. The “monolectal view” of language alternation: An analysis of business meetings in a foreign corporation in Japan. 言語科学会第 16 回年次国際大会. 2014 年 6 月 28 日. 文教大学.

村田和代. 2013. NZ および日本のビジネス・ミーティングにみられるスモールトークについて. 第 34 回社会言語科学会研究大会. 2013 年 9 月 7 日. 信州大学.

Cook, Haruko. Rethinking of an east and west divide in politeness: Superiors’ directives in a Japanese workplace. Plenary speech at the 8th International Politeness Symposium. 2014/7/10. University of Huddersfield, UK.

Cook, Haruko. “Rethinking of strategies and discernment: Superiors’ directives in a Japanese workplace” Invited conference presentation at the 8th International Conference on Practical Linguistics of Japanese, , March 22-23, 2014/3/23. National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tokyo, Japan.

Barke, Andrew. Variation within the workplace: Japanese reference and address forms in the construction of identity. Sociolinguistics Symposium 19. 2012/8/23. Berlin, Germany.

Murata, Kazuyo. Constructing identity and enacting power and politeness through humour in Japanese business meetings. Sociolinguistics Symposium 19. 2012/8/23. Berlin, Germany.

Saito, Junko. Subordinates’ construction of institutional identities in the Japanese workplace. Sociolinguistics Symposium 19. 2012/8/23. Berlin, Germany.

Cook, Haruko. Male employees’ use of referent honorifics in Japanese workplace: Construction of a professional self. Sociolinguistics Symposium 19. 2012/8/23. Berlin, Germany.

〔図書〕(計 1 件)

Cook, Haruko. (forthcoming). Superiors’ directives in the Japanese workplace: Are they all strategies? In Mori, J., Matsumoto, Y., and Hudson, M. (Eds.), Recent Advances in Japanese Grammar and Discourse. Amsterdam: John Benjamins

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村田 和代(Murata, Kazuyo)
龍谷大学・政策学部・教授
研究者番号：50340500

(2) 研究分担者

バーク エー・ジェ(Barke Andrew)
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号：90615741

(3) 研究協力者

クック 治子, ハワイ大学
齋藤 純子, テンプル大学ジャパンキャンパス
ホームズ, ジャネット, ニュージーランド
国立ビクトリア大学

クック氏、齋藤氏は、国内の大学（府省共通研究開発管理システム（e-Rad）研究機関）の所属ではないためとして研究協力者としての参加であるが、本研究は4名の共同研究である。